

現代中国のまちづくり ——客家地域を中心として

河合 洋尚

東京都立大学准教授

山口大学人文学部 異文化交流研究施設第41回講演会

2023年12月15日

一、はじめに

私は社会文化人類学（以下、人類学）を専攻し、2003年から2019年まで中国南部でフィールドワークを実施してきた。特に2004年から2011年にかけては広東省の大学で訪問学者や研究員、講師といった身分で在籍し、現地の様子を目のあたりにしてきた。この期間には、福建省、江西省、湖南省、広西チワン族自治区、四川省、雲南省など中国南方各地に赴き、見聞も広めた。さらに、日本に帰国してからもたびたび中国南部に渡航して短期間のフィールドワークを繰り返した。

私は広東省ではまず広州市の中山大学に籍を置いたため、広州の西関地区（以下、西関）でフィールドワークをし、博士論文を執筆した。西関は広州の下町にあたり、私が滞在した期間は、ちょうど歴史的都市の再生に着手しているところであった。西関はかつて城下町として栄えた商業の街であったが、高齢化が進み、建物も老朽化していた。そこで広州市政府は、史料や記憶に基づき、最も栄えたとされる民国期（1912～1949年）の景観を再現させることを試みた。学者、メディアだけでなく、行政組織の末端である社区しゃくが呼びかける形で一部の住民もこれに参加していた。私は都市空間や景観建設を研究テーマとしているため、西関における歴史的景観の再生活動に関心を抱き、それを人類学の視点から考察して博士論文を書き上げた。その成果は、『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』（2013年、風響社）として刊行されている。

博士論文を完成させた時、私は広東省東北部の梅州市にある嘉応大学客家研究院で講師として着任していた。梅州市は、客家ハッカと呼ばれる漢族の一系統が住む、客家の集住地として知られる。客家は、中国南部の各地に居住しており、その一部は華僑として海を渡って行った。梅州市は、中国南部や世界各地に住む客家のルーツとも呼ばれる地である。例えば、シンガポールの初代首相であるリー・クワンユーや、タイの首相を3名（タクシン、インラック、ペートンタン）輩出しているチナワット一族の祖先は、いずれも梅州市から移住した客家であるといわれる。梅州市は広東省の山奥にあるエリアであるが、世界の客家華僑にとっては名高い「故郷」である。私はその梅州市に2004年から通い、広州市との比較研究をしていたこともあり、博士論文執筆後は本格的に客家研究へとシフトした。

私は、梅州市の大学で勤務しながら現地を見聞すると同時に、中国南部各地の客家の居住地にも出かけ、見識を広めた。客家の衣、食、住、アイデンティティ、社会的ネットワークなどへの理解を深めたが、ここでも客家の街を建設する動きに目がとまった。それ以前にも私は、2003年に指導教員の調査助手として江西省南部と福建省西部の客家地域へ赴く機会があり、特に福建省長汀県では客家の街をつくらうとする現場を見ることができた。2011年には、四川省成都市で「中国西部客家第一鎮」という客家の街の建設にまつわる情報を得ることができ、その後、湖南省瀏陽市で「中国中部客家第

一鎮」を建設する初期の現場を見ることもできた。

本稿は、福建省長汀県、広東省梅州市、四川省成都市、湖南省瀏陽市の4つのエリアをとりあげ、客家の居住地における「まちづくり」の様相を比較・検討する。私は、偶然にもこれらの「まちづくり」の初期の状況を見聞することができたので、その情報をここで共有することにしたい。「まちづくり」という用語は、さまざまに使われることがあるが、原則的には、①地域に現存する資源を活用して（ブランド化）まちの魅力をつくること、②行政だけでなく住民が主体的に参加すること、というニュアンスを含む。まちづくりの用語が含意する「地域資源活用」と「住民参加」は実は21世紀の中国の都市開発でも注目を集めるようになってきている。本稿は、そのような現代中国のまちづくりの一端を、客家地域の事例から示すことにしたい。

中国の都市開発は行政のトップダウン型が主体であると一般的に考えられており、それは多くの場合間違いではない。だが他方で——博士論文で扱った広州・西関もそうであるが——中国都市の建設には住民や学者が参加するケースが散見される事実も見逃すべきではない。本稿は、そのような地域資源利用型、住民参加型の都市建設を「まちづくり」と定義し、その実態をとりあげていく。結論の一部を先んじて述べると、現代中国のまちづくりは、広州・西関のように社区が主体となるケースばかりではない。本文中でみる長汀県や梅州市の例のように、宗族（親族集団）が自己の威厳を復権しようとする動きと重なり合うこともある。また、住民参加が得られず、結果的にトップダウン式の都市開発となるケースもある。本稿は、見聞録のスタイルをとりつつ、その詳細を記していくことにしよう。



図1 本稿で登場する地名

二、客家首府・長汀県のまちづくり実践

私は、2003年4月に東京都立大学の博士課程に進学し、同年8月、指導教員であった渡邊欣雄先生および当時非常勤講師として来られていた蔡文高先生とともに、江西省贛州市と福建省長汀県へ赴いた。それまで個人旅行としては広州市、雲南省、北京市、山東省などへ行ったことがあるが、贛州市と長汀県は私にとって初めての中国大陸における本格的なフィールドワークであった。

図1にみるように、贛州市、龍岩市、梅州市は、江西省—福建省—広東省の境界地帯にある。この境界地帯は客家の主要な居住地であり、本稿では「交界区」と称す。交界区は山岳部であり、中国東南部にあっては相対的に経済力が低く、また清朝期から人口密度が高まったため、交界区から客家が中国南部や世界の各地に移住した。

交界区では1990年代後半より、客家文化を資源利用する都市開発が進められた。私が2003年に贛州市を訪れた時、すでにそのような風潮が目に見えてとれた。2004年には第19回世界客家大会（世界の客家団体の代表が一堂に会す大会）が贛州市で開催されることになっており、その準備もあって客家の文字が街中に溢れていた。大会に向けて、五龍客家風情園や客家文化城という、客家のテーマパークが市内で建てられた。五龍客家風情園には、客家のシンボルともなっている円楼を模した建造物がつくられるなど、客家の風情が体験できる空間として建設された。客家文化城には客家宗祠が建設され、世界の客家が参拝に訪れる空間となった。私は2004年の世界客家大会にも参加したが、客家文化城は大会参加者が訪れる主要なスポットの1つとなっていた。

ただし、これらは行政とデベロッパーが主体となり建設したテーマパークであり、住民の主体的参加を得て建造されたものではない。私は個人的に贛州市街区（都市部）で住民が参加するまちづくりがあるという話を耳にしたことはない。それどころか、2004年の時点で贛州市街区の住民たちは、贛州市街区まで客家の街として宣伝することに強い違和感を抱いていた。全体的にみると贛州市は中国で最も客家人口が多いエリアであるが、例外的に市街区は西南官話系の贛州語を母語とする漢族（非客家）が主流を占めているからである。それにもかかわらず、政府が贛州エリア全体を客家の居住地として売り出したため、「私は客家ではないし、贛州市街区は客家の街ではない」という声があちこちで聞こえてきたのである。

それに対して、長汀県では、地域資源活用と住民参加の双方が織り込まれたまちづくりが、一部でみられた。長汀県は客家の主要な居住地である。長汀県は、今でこそ福建省龍岩市の管轄下にある一つの県にすぎないが、唐代から清代にかけては、龍岩市と隣の三明市の一部を包括する汀州府の中心であった（写真1）。

長汀県の中心街は古都であることに加え、1930年代前半には共産党の活動拠点の1つともなり、1994年には国から歴史文化名城の称号が与えられた。その後まもなく長汀県政府は、革命文化と客家文化を軸とする都市開発を推進した。後者については具体的に、長汀県を「客家首府」、域内を流れる汀江を「客家的母親河」（客家の母なる川）と名づけ、川のそばに広場をつくり、「客家の母」と称する女性の彫刻を立てた。そして、客家は祖先祭祀を特に重んじるという言説に基づき、宗祠（祖先の位牌を置く建物；写真2）が多く立ち並ぶ河田鎮の一角を「宗祠一条街」という名で修繕・保存しはじめた。



写真1 長汀県城の上空写真
(2003年、筆者撮影)



写真2 河田鎮の宗祠
(2003年、筆者撮影)

2003年8月の時点で、長汀県の県城では客家文化を資源とする都市開発が進められ、河田鎮の宗祠一条街も県政府の主導による修繕・保存がまさになされているところであった¹。

住民参与のまちづくりといっても、住民自身はまち全体を改善する意識に乏しかった。河田鎮では、宗祠の所有者である親族集団、すなわち宗族が「破壊」された自らの宗祠を復興させるための活動を展開していた。1つの例として、宗祠一条街にある劉氏の宗祠をとりあげてみよう。劉氏の宗祠は、1930年代初期に共産党政権により接収され、工場や住居として使われてきた。だが、改革開放政策が始まると、劉氏は宗族の祖先崇拜を復活させ、宗祠の返還を県政府に求めた。1997年にはこの宗祠がかつて共産党の活動拠点であったことから県指定文化財となり、一般公開をして観光客を受け入れることを条件に、劉氏に返還された。そして、劉氏は一族（地元在住者から華僑までを含む）から位牌の安置費用をとる形で資金を集め、宗祠を修築し、新たな亭をつくった。劉氏の目的は一族の重要な景観をとりもどすことであったが、それは結果的に、住民自らが主体的に宗祠一条街という街並みをつくる貢献をなしたのである。

三、世界客都・梅州のまちづくり実践

長汀県で客家文化を用いた開発が着手されはじめた時期、広東省側の梅州市でも同様の動きが顕著になっていた。梅州市では1994年に中国大陸初の世界客家大会が催され、その後、市政府が客家文化を重視し始めた。その動きがさらに強まったのは、2004年に梅州市政府が「文化梅州」政策を唱え、客家文化を地域開発の根幹に据えてからである。

客家文化を資源とする都市開発は2004年以降、梅州市の各地で促進されるようになったが、そのうち最も規模が大きかったのが中心都市である梅江区とそれに隣接する梅县区である。両者は生活圏として明確に分けられないことがあるので、ここでは梅江区と梅县区を梅県と総称する。私は2004年から梅県に通い、また2008年から2010年の間にそこで暮らすなかで、まさに進行中であった都市開発の様子を目の当たりにしてきた。

そのなかで私の目を惹いたのは、梅県の都市開発にあたり、行政やデベロッパーが想定する客家文化と、住民が考える客家文化との間に一定のズレがあったことである²。

行政やデベロッパーにとって、客家文化は梅県の空間的特色をつくる資源であった。換言すると、行政やデベロッパーは、華僑や観光客などの外部者がイメージする客家の故郷を建設し、それにより彼らが梅県に来て金を落としてくれることを期待した。だから行政やデベロッパーは外部者がイメー



写真3 円楼型の体育館を活用した開発区
(2004年、筆者撮影)



写真4 困龍屋の上空写真
(2014年、夏遠鳴撮影)

ジする最も有名な客家文化、例えば円形土楼（以下、円楼）を模した博物館、体育館、レストラン、マンションなどを次々と建設していった（写真3）。梅県には伝統的に円楼がないにもかかわらず、である。行政とデベロッパーは、華僑や観光客がイメージする客家の故郷をつくりだすため、客家公園や客天下観光産業園といったテーマパークの建造にも着手しており、いずれも円楼を模した建造物がつくられている。それにより、観光地としての梅県の魅力を高めていった。

宗教信仰も客家の魅力あふれる都市開発の資源として使われた。客家は、祖先崇拝を重視し、三山国王や定光古佛といった特定の神仏を信じる人々としてイメージされることがある。デベロッパーは、そうしたイメージを逆手にとり、1990年代後半には三山国王を祀る泮坑リゾート村を再開発した。また、2006年には客家が教育を重んじるというイメージに基づいて孔子廟（梅州学宮）を再建し、客家文化観光の1つとした。中国は社会主義を根幹とするが、カソリック、プロテスタント、イスラーム、仏教、道教の5つの宗教が公認されている。三山国王は道教の神であり、孔子を創始者とする儒教は宗教ではなく道徳と位置づけられている。三山国王や孔子は海外の客家の間でも信奉されることがあるため、客家華僑との結節点として宗教景観の形成が促進された。

こうした都市開発に対する地域住民の反応はさまざまであった。ただし、私は梅県で暮らすなかで、なぜ円楼を模した建造物を梅県でつくるのかという地域住民の声をたびたび耳にした。梅県の伝統集合住宅は円楼ではなく、困龍屋である。写真4にみるように困龍屋は一階建て——稀に二階建てがある——であり、前方には半月型の池があってそれを含めると全体的に馬蹄形をしている。他にも梅県には客家の人々が住んできた一戸建て住宅があるが、円楼は福建省西部の永定県やその近隣諸地域に分布する集合住宅で、梅県は円楼の文化圏ではない。また、梅県の客家にとって客家とは自らと同じ系統の客家語を話す人々であり、彼らと別系統の客家語を話す永定県の人々は「福建人」とみなされることもあった。だから、梅県の特に高齢者は、なぜ困龍屋など自分たちが生活したホンモノの客家文化を取り壊し、円楼というニセモノの「福建文化」を客家のものとして強調するのか、理解しがたかったのである。

困龍屋は、広い敷地を占めるわりには、通常は数十人しか住むことができず、しかも誰が居住するかの権限は管理者である宗族に任される（伝統的には同じ宗族の一員しか居住することが許されない）。行政やデベロッパーからすると、もし困龍屋が占める土地を開発して商業ビルやマンションを建設すれば、より多くの収益を見込むことができる。21世紀初頭の時点で梅県にはほとんど使用され

なくなった囲龍屋もあり、その所有者は一定の保証を得るかわりに囲龍屋の取り壊しに賛同した。だが、囲龍屋をまだ利用している宗族、とりわけ規模の大きい宗族は、囲龍屋の取り壊しに異議を唱え、それを保護する活動を展開するようになった。

囲龍屋の保護活動は、私が広東省に滞在していた2004年から2011年の間にも見聞きすることができた。彼らが囲龍屋の取り壊しに反対した理由はいくつかある。第一に、囲龍屋には100～400年の歴史をもつものが少なくなく、その内部には祖先の位牌を祀る宗祠もある。囲龍屋には他にも祖先が科挙に合格したことを示す石柱や扁額などもあり、これらの祖先の「偉業」を示す大切な物的証拠——囲龍屋そのものも含める——を破棄しては、祖先に顔向けができないと考えている。第二に、囲龍屋は風水の良いところに建てられており、祖先と現存する子孫はその良好な風水に守られてきたとみなされている。もし囲龍屋が壊されることがあれば、風水が破壊され、一族の命運が悪くなると考えている。第三に、囲龍屋はたとえ一族の者が住まなくなっても、祖先崇拜や冠婚葬祭をする場所として活用され続けており、国内外に離散した親族が集まることができる結節点ともなっている。実際、春節などの特別な行事の時には各地に離散した子孫が一堂に会し、交流を温める。そうした親族ネットワークの結節点を失うことに危機感を抱く宗族の成員もいる。

これらの理由から、宗族の人々は改革開放政策後、文化大革命によって破壊された囲龍屋を取り戻し、祖先崇拜を復活させ、海外に住む親戚から寄付を募ることで囲龍屋を修築してきた。30ほどの宗族がひしめく都市の一角、X地域をみてみるとしよう。X地域のいくつかの宗族は、香港や東南アジア諸国などに親戚がおり、1980年代から海外や近隣の親戚より寄付を募ることで、囲龍屋や宗祠を修築してきた。また、祖先崇拜などの活動を客家文化の名のもとで宣伝したり、梅県の革命や発展に貢献した祖先がいたことを強調したりしている。すなわち、客家文化を重視する行政の都市開発に草の根から参与する姿勢をみせることで、祖先から伝えられてきた建造物を自分たちの手で守ってきたのである。

X地域には、宋代に建てられたという墓もある。この墓の所有者である宗族は、都市開発の波から墓とその風水を守るため、墓の周囲の敷地を買い取って広場を建設しはじめた。具体的には、まず、中国国内外に住む一族から資金を集め、墓を修築し、その墓における祭祀活動と墓の隣にある定光古佛を客家文化としてアピールした。さらに、姓を同じくする将軍や科挙合格者を記念する亭をつくることで、一族が共産党や中華文明にも貢献してきたことを視覚的に示すようになっていく。このような宗祠の修築や広場の建設は、宗族が勝手に進めることができず、宗族のなかで地元政府とつながりがある人物が媒介して進められてきたことも付け加えておく。

X地域におけるまちづくりの動向は、先述した長汀県のそれに似ている。つまり、このエリアのまちづくりは、地域の主導のもとで人々が参与するタイプのものではなく、それぞれの宗族が親戚からの寄付をもとに自らの伝統的建造物を修復・拡張することから出発している。この種の「まちづくり」は、日本で想像されがちな、コミュニティあげて推進されるホーリスティックなものではない。各々の親族集団は、まちづくりという意識すらほとんどないまま自身の建造物を修復・拡張しており、そうした実践が特定のエリアで集積することで——時として周囲の宗族に啓発を受けながらも——結果論として地域資源活用と住民参与の双方を兼ね備えたまちづくりがなされている。

四、西部客家第一鎮のまちづくり実践

客家のまちづくりがおこなわれてきたのは中国東南部の交界区だけではない。中国の西部の位置す

る四川省成都市でもみられる。

正確な統計はないが、四川省には200～300万人の客家がいると推定されており、その多くは省都である成都市とそこから東または東南に延びて重慶市に至るエリアに住む。例えば成都の東方向にある広安市には客家が多く、その出身の鄧小平（改革開放政策を推進した中国の元国家最高権力者）も客家であるといわれる。また、成都市東郊外にある龍泉駅区や、県級市である簡陽市でも客家が集住している。龍泉駅区および簡陽市は龍泉山の麓にあり、龍泉山が地元で東山と呼ばれることから、この一帯の客家は「東山客家」と呼ばれることもある。東山一帯の客家は長いこと「広東人」と呼ばれており、1980年代に入るまで客家としての自己意識に乏しかった。だが、客家としてのアイデンティティが次第に強まっていくと、龍泉駅区の洛帯古鎮で客家のまちづくりをする機運が高まった。

洛帯古鎮で客家文化を用いたまちづくりが着手されたのは1990年代末である。私は長い間、四川省にも客家がいるらしいという漠然な情報しか知らなかったのであるが、嘉応大学客家研究院で勤務した時、洛帯古鎮で客家の街が建設されているという噂を耳にした。そこで2011年に初めて洛帯古鎮を訪れ、2014年と2015年には四川社会科学院の案内のもとでインタビュー調査を実施することができた。私が洛帯古鎮を訪れた時はすでにまちづくりがほぼ完成しており、長汀県や梅県のような現在進行中のまちづくり実践をこの目で確かめることはできなかった。ただし、洛帯古鎮では2011年の時点で円楼を模した建造物がまだ建設中であるなど、それでも2015年までの5年の間に一定の変化があることを確認することができた。また、洛帯古鎮のまちづくりを主導した人物や、まちづくりに参与した住民にインタビューすることができ、なぜ、どのように洛帯古鎮が建設されていったのかのプロセスを追うことができた³。それらのインタビューを統合すると、洛帯古鎮における客家のまちづくりは以下の契機により建設されていった。

洛帯鎮における客家のまちづくりを最初に推進したのはマレーシア華僑である邱林という人物である。邱林は、1919年にマレーシアのセランゴール州に生まれた。祖父が広東省惠州市三棟鎮からマレーシアに移住した第三代の客家であり、父親はゴムプランテーションで働いた。教師の影響で中国への愛国心が芽生え、学生時代は反日・抗日の活動に明け暮れていた。1939年5月にサイゴン、香港経由で広東省へと行き、抗日部隊である東江遊撃隊に加入した。邱氏が配属されたのは東江華僑回鄉服務団であり、この部隊は基本的にみな客家であったという。惠州市の親戚には知り合いがおらず、父から聞いた地名を手がかりに故郷の村には行ったが、生活は苦しく、また志半ばでマレーシアに帰るわけにもいかなかったため、1949年4月に重慶に行って勤務した。その後、1953年に成都に行き、省医院の創設にかかわって院長になった。計画出産の部門の副主任となり、人口の多い四川省の家族計画に貢献する生涯を送った。四川社会科学院の創設にも関与し、そこで客家研究センターが設立される時も支援した。1994年に退職してからは、自身の経歴や仕事の経験を活かせることができなかと考えた。退職前の1993年はマレーシアの惠州会館を訪れ、従兄弟が会長をしていたので、老後の「好事」（善行）をするため、マレーシア、惠州、成都の懸け橋となる客家団体を結成することを思い立った。1996年、早くから客家の縁でつながりがあった洛帯古鎮で、四川海外客家聯誼会（以下、客聯会）を結成した⁴。

客聯会は、帰国華僑を中心とする四川省で最初の客家団体である。邱氏ら東南アジアの帰国華僑は客家としての自意識を強くもっていた一方、1990年代半ばまで四川省の客家は「広東人」と呼ばれ、客家としてのアイデンティティが広く普及していなかった。客聯会は、四川省で客家アイデンティティを強める一翼も担った。客聯会は本部を洛帯鎮に置いていたこともあり、まず1997年に洛帯鎮政府と協力して広東会館、福建会館、江西会館の修復に努め、これらを海外の交流との窓口にしようと

した。そして、1999年に四川社会科学院客家研究センターの陳世松研究員とともに、洛帯鎮で客家をモチーフとした観光開発を促進する提案をし、洛帯鎮政府と共同で都市開発を進めようと計画した。そして、四川省の副省長であった李達昌の支持を得て、その計画を実行に移すと同時に、2000年に福建省龍岩市で開催された第16回世界客家大会と、2002年にインドネシアのジャカルタで開催された第17回世界客家大会に参加した。ジャカルタ大会開催時にはすでに2004年に贛州市で第19回大会が開催されることが決まっていたが、2005年の第20回大会を成都市の洛帯鎮で開催する権利を勝ち取った。そのため、2005年に世界各地から客家を迎えるということもあり、洛帯鎮を客家風情に溢れる街とするための建設が急速に進められた。



写真5 洛帯鎮の街並み
(2011年、筆者撮影)



写真6 洛帯鎮の円楼型博物館
(2014年、筆者撮影)

洛帯鎮の街並みは、梅県や長汀県城と比べると、雲南省の麗江古城のような西南の風情が漂う（写真5）。街並みの改造にあたっては、広東会館や湖広会館のような古鎮にもとからあった建物を活用するなど、地域に現存する資源を使ってまちの魅力をつくりあげてきた。その一方で、円楼の形を模して博物館（写真6）を建造するなど、現地になかった新たな建造物も作りだした。さらに、洛帯鎮では、個々の商売人が地酒を客家文化の名のもとで売り出したり、四川客家料理のシンボルとして傷心涼粉という麺料理を創作したりするなど、来訪者に四川客家文化を体験できるようにした。さらにはピアノやパンダのぬいぐるみなどどこにでもあるものまで「客家」の文字を冠し、看板や表札を掲げた。そうすることで、洛帯鎮を客家風情溢れる街並みとして開発していったのである。

客家らしさは、建築や商品などのモノだけではなく、民俗活動でも表された。2000年から春節に客家火龍節を、2002年から夏に客家水龍節を催してきた。客家火龍節は、地元の宗族である劉氏の間で伝えられてきた伝統的な龍舞をアレンジしたものである。劉氏の龍舞はもともと自身の村落で催されてきた。だが、洛帯鎮で客家のまちづくりをするというので、劉氏が協力し、中心街のストリートで客家火龍節として催すようになった。客家水龍節は現地の伝統芸能ではなく、火龍節と対をなすものとして、タイ族の水かけ祭りにヒントを得て創出された。客家火龍節や客家水龍節は劉氏が担っており、鎮政府が給与を払う形で地元の客家の若者を集め、イベントを開催してきた。これらの新しい観光用の芸能は伝統的なそれと同じではないが、それでも街づくりの一環として若者を参与させることで、芸能を継承させる原動力となっている。

邱氏は、退職前に政府機関に勤めてはいたが、彼は行政側の人間ではなくマレーシア帰国華僑の立

場から、洛帯鎮のまちづくりを提案・推進してきた。もう1人の主要な推進者である陳世松も国家の研究機関に勤めてはいるが、洛帯古鎮の建設に参加したのは客家研究者の身分である。両者とも行政サイドに人脈があり、政府の許可と協力を仰ぎながら進めてはいるが、洛帯古鎮の開発は完全なる政府のトップダウン型とはいえない。むしろ現地の資源を使いながら住民とともに推進する、まちづくりのスタイルをとってきた。

客家のまちづくりが進められる前、洛帯鎮は成都郊外のどこにでもある古鎮であった。だが、2006年には観光客が100万人を突破し、商業収益と観光収益も数倍に増加した。四川省で成功したまちづくり実践の一例ともなったのである。

五、中部客家第一鎮の建設

2010年代に入り、湖南省の瀏陽市で「中国中部客家第一鎮」を建設する計画が浮上した。その舞台は、瀏陽市の東北部にある大圉山鎮である。大圉山鎮は人口の約85%が客家で占められ、特に800年の歴史があるという東門古鎮で客家風情溢れるまちづくりが進められる計画が提示された。

大圉山鎮では梅州など広東省から移住した客家がおり、客家語を話す。中国の他の地域と同じく改革開放政策前までは客家としての自己意識が薄かったが、1980年代には客家意識が強まった。私は西部客家第一鎮として宣伝される洛帯古鎮を訪れていたため、中国中部客家第一鎮建設に興味を抱き、2013年8月に瀏陽市を訪れた。

瀏陽市の中心部からバスに乗って大圉山鎮に行くと、入り口の白い壁に「瀏陽河源・中国中部客家第一鎮」、「舌尖上的故郷——旅遊特産、客家風味小喫」という文字が赤い字で書かれていた(写真7)。この地を「中部中国客家第一鎮」として開発に着手しはじめたことが分かる。しかし、大圉山鎮に行って周りを見渡しても、客家の風情と思われる景観を目にすることはほとんどない(写真8)。都市計画によると、東門古鎮には民俗風情街が建設される予定であったが、そこでは円楼型の建造物が建設されている様子はなく、さらには客家の文字を掲げた看板を見ることはほとんどなかった。また、中国中部客家第一鎮は、エコツーリズムやレッドツーリズムと一体化して建設する計画があったが、後者の目玉とされていた錦綬堂(毛沢東が滞在したという巨大な古民居)は2013年8月の時点でまだ対外開放はされておらず、ましてや客家を示唆する宣伝文句はどこにもなかった。

大圉山鎮の街を歩いていると、「客家風味」という看板を出しているレストランが2件だけあった。店に入り客家料理を注文したが、何が客家料理なのかその店主にはあまり通じなかった。店主はそこが家庭料理の店であり、石鍋魚(一般的に客家料理としてはイメージされないご当地メニュー)がその看板料理であると述べた。代表的な客家料理としてイメージされる醸豆腐はないか聞くと、普通の豆腐と揚げ豆腐の料理を紹介され、何が醸豆腐なのかすら伝わらなかった。客家が開いた店だから「客家風味」の看板を掲げていたが、通常イメージされがちな客家料理についての知識がまだなく、地元の家庭料理を客家料理として提供する状況にあった。

現地で複数の住民に話を聞いたところ、中国中部客家第一鎮は政府の主導で建設が進められているものであり、住民側の提案により始まったわけではない。大圉山鎮では客家語が話されてきたが、街の中心部では方言である客家語を使うと笑われるため、湖南系の瀏陽語を使うことが多い。客家語は家庭の言葉であり、客家や客家語は外でひけらかすものではないのだという。また、大圉山鎮は湖南省北部の有名な観光地である鳳凰古鎮の景観を真似してつくられており、それならば近隣の白沙鎮の方がよほど客家の風情に溢れているという声も複数聞こえた。洛帯鎮と比べると、少なくともその建



写真7 大田山鎮における壁の宣伝文句
(2013年、筆者撮影)



写真8 大田山鎮の徽式建築
(2013年、筆者撮影)

設の初動において住民の参与と理解があまり得られておらず、住民参与型のまちづくりは実現されていないようであった。華僑の影響についても耳にすることはなかった。

私はその後の状況をこの目で確かめていないが、中国中部客家第一鎮の建設が大幅に進展したという噂は2019年の時点でも耳にしなかった。もっとも、コロナ禍を経て大田山鎮におけるまちづくりが新たな進展を見せている可能性はある。ただし、帰国華僑や学者が尽力し、住民の参与も得た中国西部客家第一鎮と違って、中国中部客家第一鎮の建設は原則的にトップダウンであり、その初動において住民が何を始めているのか意識が薄かったのは確かである。

六、おわりに

私は広州・西関のまちづくりをめぐる調査研究をおこなった後で、中国各地の客家地域を歩き、客家文化を資源とする都市開発やまちづくりの実態をいくつかみてきた。もちろん私が一人で見聞できる範囲には限界があり、客家のまちづくりの全貌を捉えきれているわけではない。ただし、私が歩き観察した範囲だけでも、地域資源活用と住民参与の要素があるまちづくりの実態を垣間見ることができた。

本文中で述べたように、私が客家のまちづくりを見聞するなかで気づかされたのは、現代中国におけるまちづくりの形態が、いわゆる——日本などでみられる——コミュニティ・ベースのそれだけとはかぎらないということである。広州・西関の場合、行政の末端組織である社区が主導してその管轄区域でまちづくりを推進しようとしていたが、長汀県や梅県では——政府の都市開発に呼応してはいるものの——宗族が各自の宗祠や墓を修復・拡張することに力点を置いていた。最初からコミュニティという「面」を基盤としてまちづくりが促進されてきたのではなく、各々の宗族が「点」をつくり、「点」が集積することからまちづくりが始まっていたのである。当時は「地方創生」や「社区造営」という日本語のまちづくりに近い用語が使われることもなかったし、当事者たちは日本でいうまちづくりを推進している意識もなかった。住民参与型のまちづくりがみられたのは結果論であるといえる。

中国では、まちづくりといっても行政の力が強く、宗族は各自の宗祠や墓を修復・拡張するにあたって、行政の顔色をうかがいながら進めなければならない。長汀県や梅県では客家のまちづくり

をするにあたり、革命観光の要素も入れていたが、それは観光客だけでなく行政への「説明責任」といった側面もある。実際、洛帯古鎮のまちづくり実践は、政府機関に勤務経験がある帰国華僑と学者が推進しており、完全な民間主体の動きとはまではいえないだろう。彼らは行政側の立場からではなく、華僑団体・学術団体の人間として、民間側とつながりながらまちづくりを推進したが、それでも行政側と強い関係をもつ人物であることには違いない。ただし、行政の力が強い中国にあっては、むしろ行政と民間を橋渡しできる媒介者が重要な役割を担っており、彼らの存在抜きには中国のまちづくりを語ることは難しいかもしれない。程度の差こそあれ、長汀県や梅県でもこのような媒介者がまちづくりを促進する重要な役割を担ってきた⁵。規模の大きい有力宗族ともなれば、一族のなかに政府に顔がきく成員がおり、そうした人物が媒介となってはじめてまちづくりが成立するのである。

さらに長汀県、梅県、洛帯古鎮のまちづくりには、別の共通点もある。華僑が参与していたことである。長汀県、梅県では宗祠などの修復・拡張において、華僑が金銭的な援助をしていた。とりわけ多くの客家華僑を送り出している梅県では、東南アジアなどに住む華僑の金銭的支援がまちづくりの大きな原動力となっていた。洛帯古鎮では、マレーシア華僑がまちづくりの主導的立場を担った。客家地域のまちづくり実践が推進された背景には、中国を越えたネットワークが存在していたともいうことができるだろう。他方で、住民や華僑の参与が得られなかった瀏陽市大圃山鎮では、少なくとも建設の初期においてはトップダウン式の都市開発にとどまった。

本稿はまちづくりがテーマであるため都市部（行政上都市とされる範囲）の事例をとりあげたが、客家文化を利用する地域開発は村落部でも盛んにおこなわれている。他方で、客家文化を用いる都市開発は、本稿であげなかったが他にもある。例えば、広西チワン族自治区の陸河県では円楼を模した建造物がつくられ、周囲を壁で囲い込む集合住宅を客家文化の名目で保護している。中国北部の開封市内では、客家が住んでいないにもかかわらず、そこが客家のルーツだということで孔子廟公園を客家の景観として再開発している。最も顕著な動きは、深圳市における甘坑古鎮の開発である。2013年、市政府はこの古鎮の使われなくなった民居群を改造して観光地とする計画を立て、2014年に観光客を受け入れ始めた。2016年には大手国有企業である華僑城グループが参入し、2017年に私が訪れた時には「客家」の看板を掲げる店舗や博物館が並んでいた。ここでは地元の伝統的な服飾である涼帽（暑さ除けのために笠の周りから布を垂らす帽子）や麒麟舞を強調する一方で、擂茶など地元にはない、台湾など外で客家文化とイメージされる要素がところどころでみられる。甘坑古鎮は新設された深圳北駅（高鉄の終着駅）の東北方向にあり、その利便性も手伝って多くの観光客で賑わっている。トップダウン式の都市開発ではあるが、客家という民族集団の文化を体験できる一種のテーマパークとして近年人気を集めている。

新型コロナウイルスの感染拡大を経て、中国は大きく変化したと聞く。私はその後、中国を訪れていないが、中国の都市開発やまちづくりにいかなる変化が生じたかを検討することは興味深い問題である。とりわけトップダウン型の都市開発から始まった瀏陽市の東門古鎮や深圳市の甘坑古鎮では、その後、地域住民の参与を得てまちづくりの様相を呈するようになってきているのだろうか。これらは今後着目すべき課題でもある。

本稿では、中国でも地域資源利用型、住民参与型のまちづくり実践が垣間見られる事実を提示する一方で、中国のまちづくりは宗族、華僑、学者などが主導することがあり、日本でいうまちづくりの概念に収まりきらないことを示した。中国のまちづくり研究を進めるにあたっては、日本のようなコミュニティ・ベースのまちづくり（中国語で「地方創生」「社区营造」などと呼ばれる）を想定するだけでなく、その地に根付いている宗族ネットワークや華僑ネットワーク、もしくは研究者らの参与

についても配慮していく必要がある。研究者のなかには地元の出身者がおり——王朝時代の「郷紳」のように——行政と住民をつなぐパイプ役を担っていることもある。

中国を対象とする人類学的研究でこれまで「まちづくり」という用語が使われてこなかった理由の1つは、それが日本でいうまちづくりという民俗用語^{フォークターム}と必ずしも合致しなかったからかもしれない。しかしながら、まちづくりを「地域資源利用と住民参与を兼ね備えた都市開発の一側面」という学術用語として捉え直すならば、中国都市開発をめぐる人類学的研究をさらに一歩進めていける可能性がある。本稿はそのささやかな試みの第一歩である。

（附記）本論は2023年12月15日、山口大学人文学部異文化研究交流施設において行った講演会「現代中国のまちづくり——広東省の「故郷」建設を中心として」のうち、客家に関する部分を取りあげ大幅に加筆・修正したものである。そのため副題にも変更を加えたのでご了承ください。当日参加いただいた方々に篤く感謝申し上げます。

¹ 蔡文高「福建省西部における祖先祭祀の復興と客家」瀬川昌久・飯島典子（編）『客家の創生と再生——歴史と空間からの総合的検討』（風響社、2012年、217-218頁）にも詳しい。共同調査であったため本稿の内容と重なるところも多いが、本稿ではまちづくりという観点から論じ直している。

² この節で言及されている梅州市の事例については、河合洋尚『＜客家空間＞の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』（風響社、2020年）でも言及している。本稿はそれをまちづくりという視点から再解釈した。

³ 洛帶古鎮の建設については、河合洋尚「四川省における＜客家空間＞の生成——成都市東山地区の都市景観開発を中心として」『中国21』（愛知大学現代中国学会、49号、2019年）に詳しい。本稿で記載している事例と重なるところも多いが、本稿では未発表の情報を補足したうえで、まちづくりの視点から再解釈している点が新しい。

⁴ 2015年6月3日、邱林氏へのインタビュー調査に基づく。四川社会科学院の李軍、嘉応大学の夏遠鳴らが同席した。

⁵ 河合洋尚「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」『文化人類学』（81巻1号、2016年）にも詳しい。